
風と樹と

ピストン源次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風と樹と

【Nコード】

N7002L

【作者名】

ピストン源次郎

【あらすじ】

イチヨウの樹に恋した風の哀しいお話です。

一陣の風がイチヨウの樹に恋をしました。

彼は彼女の気を引こうと、樹の周りをぐるぐる駆け回りながら夢中でしゃべりかけました。

「ねえねえ、こんな話知ってる？・・・」

それまで地上を駆け巡りながら目にしてきた色々な出来事や様々な風景の話です。

「でさあ、こんなこともあったんだよ・・・」

それがかたいそう面白かったのか、イチヨウの樹はうつそうと生い茂る緑の梢を揺らして、くすくす笑ってくれました。

それがたまらなく嬉しかったのか、一陣の風は度々その丘に立ち寄るようになりました。

そして、動けないイチヨウの樹のために、旅の途中で仕入れてきた話をたくさん聞かせてあげるのです。

いつしかイチヨウの樹も、そんな一陣の風に好意をもつようになっっていました。

そしてよく晴れたある秋の日。

またいつものようにやってきてくれた風に、イチヨウの樹はこう声をかけました。

「少し私の梢で休んでいってくださいな」

それは、素朴な愛情と親切心から出た言葉でした。

事実、イチヨウの梢には、多くの小鳥や昆虫たちがゆったりと羽を休めていました。

そこは、誰にとっても居心地のいい楽園だったのです。でも一陣の風は、なぜかイチヨウの樹の周りをぐるぐる回り続けるばかりで返事をしません。

イチヨウの樹は、再度優しく誘いました。

「そんな駆け回ってばかりいたら、さぞかし疲れるでしょう。ささ、遠慮しないで」

すると風は、いつにない神妙な口調でこう言ったのです。

「僕のこと・・・ずっと忘れないでいてくれる？」

彼女は最初、何のことか分かりませんでした。

それでもにっこり微笑んで頷きました。

ひとしきり、ザワツと波打つイチヨウの梢。

そして、消え入りそうな風の声。

「僕も君のこと忘れないよ」

それが、おしゃべりな風の最後の言葉でした。

風が立ち止まるとどうなるか。

それを彼が知らなかったはずもないでしょう。

でも彼は、それを自ら選んだのかもしれない。

最後に、一度でいいから大好きなイチヨウの梢で休んでみたいと思っただのかもしれませんが・・・

以来、イチヨウの樹は秋になると、はらはらと悲しげな音を立て

風の後を追うように色づいた葉を舞い落とすようになったそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7002l/>

風と樹と

2010年10月17日03時15分発行